九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

S100P in Duodenal Fluid Is a Useful Diagnostic Marker for Pancreatic Ductal Adenocarcinoma

松永, 壮人

https://hdl.handle.net/2324/2236060

出版情報：Kyushu University, 2018, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名：松永壮人

論 文 名：S100P in Duodenal Fluid Is a Useful Diagnostic Marker for Pancreatic Ductal Adenocarcinoma
（十二指腸液中 S100P 濃度測定が膵管癌診断の有用なマーカーとなりうる）

区　　分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

目的：膵管癌の有用なスクリーニング法の確立が望まれている。本研究は上部消化管内視鏡検査(Esophago-gastro-duodenoscopy: EGD)や超音波内視鏡(Endoscopic ultrasonography: EUS)時に採取した十二指腸液中の分子マーカーが膵管癌のスクリーニングに有用かどうかを検討した。
方法：本試験は 2011 年 10 月から 2014 年 7 月の間に、九州大学で EGD、あるいは Mayo clinic(フロリダ州・ジャクソンビル)で EUS を受けた膵管癌患者 94 名、膵管内乳頭粘液性腫瘍(intraductal papillary mucinous neoplasm; IPMN)患者 85 名、慢性膵炎患者 29 名、正常膵の対照者 61 名を含む計 299 名で行われた。十二指腸液はセクレチンを投与せずに採取され、分子マーカーとして十二指腸液中 CEA(Carcinoembryonic antigen)と S100P の濃度を測定した。
結果：十二指腸液中 S100P 濃度は膵管癌群、慢性膵炎群で正常膵対照者群より有意に高かった。S100P 濃度と年齢を合わせたロジスティック回帰モデルでは、stage 0/Ia/Ib/IIa の膵管癌の診断感度、特異度は 85%、77%であり、receiver operating characteristic カーブから算出される area under the curve は 0.82 であった。十二指腸液中 CEA 濃度は各膵疾患群と正常膵群の間に有意差を認めなかった。
結果：一般的な検査である EGD 時に施行可能な十二指腸液中 S100P 濃度測定が、膵管癌の診断に有用な可能性が示された。